一八八五年七月十三日（月）

聖なる山車祭（ラタ・ヤートラ）――バララーム家の礼拝室にて

プールナ、若いナレン、ゴパール・マー

聖ラーマクリシュナはバララーム家の応接間で信者たちといっしょに坐っておられる。アシャル月白文一日（ついたち）、月曜日。一八八五年七月十三日、午前九時。

明日は山車祭（ラタ・ヤートラ）である。祭によせてバララームはタクールをお招きしたのだ。この家には大聖ジャガンナータの神像を永代祭祀している。小さな山車（だし）もあって――山車祭（ラタ・ヤートラ）の日には外のベランダに引き出す。

タクールは校長と話をしておられる。そばには、ナラヤン、テージチャンドラ、バララームはじめ、大勢の信者たちがいる。プールナのことが話題に上がっている。プールナは十五才になる少年だ。タクールはこの少年にとても会いたがっておられるのである。

聖ラーマクリシュナ「（校長に）――えーと、あの子（プールナ）はどの道を通ってわたしに会いにくるだろうね？　お前がドゥイジャとプールナを引き合わせておくれ。

同じ傾向で同じ年令の人を、わたしは引き合わせることにしているんだよ。ワケがあるのさ。こう

すると二人とも進歩するんだ。プールナの情熱を見たかい？」

校長「はい、おっしゃる通りでございます。いつか私が市電に乗っておりましたら、彼は自分の家の屋根に上がっていて私を見つけまして、大急ぎで道まで下りてきて、そこからとても熱心におじぎ（プラナーム）をしました」

聖ラーマクリシュナ「（目に涙をいっぱいためて）――アハー！　アー！　――この人（校長）が（いちばん至高なるものが得られるように）導いてくれなすった。神に恋い焦（こ）がれていなければ、そんなふうにはならないものだよ」

〔プールナの男らしい性質、神聖な性質――苦行（タパス）のゆえにナーラーヤナは人の子として生まれる〕

この三人は男らしい性質を持っている――ナレンドラと、若いナレンと、プールナとはね。バヴァナートはちがう――あれは女性的だ（女性的性質（プラクリティ・パーヴァ））。

プールナのような境地だと、もうすぐ肉体をかなぐりすてることができるよ――神をつかめば、あんなもの用はない――さもなくば、しばらくしたら、（神聖な）本性を発揮するだろうよ。

神聖な性質だ。あれだとあまり人を恐れない。頭に数珠をかけたり、白檀（チャンダン）を体に塗ったり、樹脂香（ドゥーナ）の匂いをかがせたりすると、すぐ三昧に入ってしまう！　――そして、自分の内奥（なか）にナーラーヤナがいらっしゃることをはっきり感じとってしまう　――ナーラーヤナご自身が肉体をまとってこの世に来なすったのだということが。わたしもそうだった」

〔以前の話――霊的にきわめて優秀なバラモン婦人の三昧――ランジットの娘として生まれた大実母〕

「南神村(ドッキネーショル)でわたしが初めてこういう境地になってから何日か後に、良家のバラモン婦人が一人きた。とても優れた特質を持った人だったよ。首には数珠をかけて、香を焚(た)くとすぐ三昧に入った。少したってから大そう嬉しそうなふうになって、涙を止めどなく流しはじめた。わたしはおじぎをしてから聞いた。『マー、わたしもなれるでしょうか?』その人は、『はい!』と言った。とにかく、プールナにもう一度会いたいね。会えるだろうかねえ?

あの子はたしかに神の一部分だよ。一カケラじゃなく相当な部分だ。

かしこい子だねえ! ――成績もいいんだろう。わたしの目に狂いはなかった!

すぐれた修行の結果、ナーラーヤナがその人の子供としてお生まれになることがある。郷里に行く途中にランジット・ラヤの大きな貯水池がある。ランジット・ラヤの家に大実母(バガヴァティー)が娘になってお生まれになった。今でもそれを記念して、チョイトロ月には年祭が行われているんだよ。そこへ行きたくてたまらないんだが――今は無理だ。

ランジット・ラヤはあの辺の地主だった。きびしい修行を神に捧げたことによって、自分の娘という形であの御方を手にいれた。彼は娘に対して、それは、それはやさしかった。娘もそのやさしさに応(こた)えて、ほとんど父親のそばから離れないほどだった。ある日、彼は地主としての用事で大そう忙しかった。娘は――子供は誰でもそうなように、『ババ(お父さん)、これは、なーに? あれは、なーに?』

と聞きながらつきまとった。父親はやさしい声で、『マー、お利口だからあっちへ行っておいで。お父さんはご用がいっぱいあるんだから――』と言いきかせたが、娘はどうしても立ち去ろうとしない。終（しま）いに彼は何の気なしに、『お前、あっちへいけ』と邪険に口走ってしまった。マーはそれを口実にして、家から出ていってしまいなすった。そのとき、一人の貝飾屋が道を通ったので、それを呼びとめて、貝の腕輪をつけた。『代金は、家のこれこれの手箱のなかにお金があるから、そこからとってちょうだい』と言ったきりそこから立ち去って、二度と姿を見せなかった。一方、貝飾屋は代金をもらうために地主邸に行き、わけを話した。娘が邸内にいないのを知った家の人々は、皆探しに走った。ランジット・ラヤは四方八方に人をやって探した。むろん、貝飾りの代金は、娘の言った箱のなかの金から支払われた。ランジット・ラヤが声をあげて泣きながら、その辺をあてもなくうろついていると、人が来て貯水池に何か見えると言う。皆して池にとんで行って見ると、貝の腕輪をした手が水の上に出ていた。あれよ、あれよ、といっている間に、それもすっかり見えなくなった。それで、今でもずっと毎年お祭をして、チョイトロ月の黒分十四日に大実母（バガヴァティー）のお祭をしているんだよ。

（校長に）――みんな、ほんとにあった話だよ」

校長「はあ、さようでございますか」

聖ラーマクリシュナ「ナレンドラは、今ではこんなことも信じているよ。

プールナはヴィシュヌの要素を持って生まれている。心の中でビルヴァ（ベル）の葉を供えて拝んだら、うけつけなかった――トゥルシーの葉と白檀（チャンダン）を供えたら、ちゃんとうけつけたからね！

あの御方はいろいろな姿で会って下さる。ある時は人間の姿で、ある時は神々しい霊の姿で――。だから、神の形も信じなけりゃいけない、どう思うね?」(訳註――ビルヴァ(ベル)の葉はシヴァ神への供え物で、トゥルシーの葉と白檀はヴィシュヌ神への供え物)

校長「おっしゃる通りでございますとも!」

〔ゴパール・マーの霊的母性――神の姿を見る〕

聖ラーマクリシュナ「カマルハティのバラモン婦人(ゴパール・マー)は、いろんな霊現象を見るそうだよ! たった一人で、ガンガーのそばにある別荘の静かな部屋に住んでいて、称名(ジャパ)に明け暮れている。ゴパール(赤ん坊の姿のクリシュナ)がそばで寝ているんだと!(話しながらタクールは身震いなさった)想像じゃない、ほんとのゴパールが! 見ると、ゴパールの手のひらは赤みがかっているんだって! いっしょに散歩するんだって! 自分の乳房で乳をのませるんだって! ――話もするんだよ! ナレンドラはその話を聞いて泣いたよ!

わたしも以前は、よくいろんなものを見た。今は半三昧のときでも、あんまりそういうものを見なくなったよ。だんだん女性的(の)気分が少なくなってくるようだ。少年の気分になってきている。だから気分を内におさえて、外にはあまり出さないんだ。

若いナレンは男性的な気分だから――心がすっかり溶け込んでしまう。外面的には恍惚となるようなことはないね。ニティヤゴパールは女性的気分の持ち主だ。だから、霊的な気分になったときは、

曲げたりねじったり体に反応がでる――肌の色も赤くなってしまう」

女と金の捨離とプールナたち

〔ビィノド、ドゥイジャ、ターラク、モヒト、テージチャンドラ、ナラヤン、バララーム、アトゥール〕

聖ラーマクリシュナ「（校長に）ねえ、たいていの人は、ほんのチョッピリ、チョッピリずつしか捨てられないが、彼等は何てすごいんだろう。

ビィノドは言っていたよ――『妻といっしょに寝なければならないので落ち込みます』と。いいかい、性交しようとしまいと、女といっしょに寝ること自体が悪い。体がこすれるし、熱くなるし！

ドゥイジャもいい境地だね。ただ体を静かにゆらせて、わたしをじっと見つめているだけだ！　これは軽くみるものじゃないだろう？　心のすべてをわたしに集中すれば、あらゆることは成就するよ」

〔聖ラーマクリシュナはアヴァターラか？〕

「わたしは何だ？　――あの御方だよ。わたしは道具で、あの御方が使い手だ。この（わたしの）中に、神そのものが宿っておいでだ！　だから、こんなに人が惹きつけられてくるんだよ。さわってやりさえすればいいんだよ！　この引力は神の引力だ。

（ベルゴルの）ターラクが、あそこ（南神寺（ドッキネーショル））から家に帰るとき、見えたんだよ。これのなかから炎

のようなものが出てきて、彼(ターラク)の後ろをついて行ったんだよ!

何日か後で、ターラクはまた南神寺(ドッキオーショル)に来た。三昧になったとき、彼の胸に足をおいた――この中にいなさる御方がね。

ほんとに、こんな少年たちがほかにいるかね!」

校長「モヒトはなかなか秀れております。あなた様のところに、一、二度まいったはずでございますが――大学の試験に二つも通りそうなほど勉強もしておりますが、その上、神を求めること非常に熱心でございます」

聖ラーマクリシュナ「そうかも知れんが、そう高い霊階(クラス)ではないよ。体の特徴があんまりよくないもの――ぺしゃんこな顔をしている。

この連中(前出のターラクたち)は高い霊格(クラス)だ。だから、肉体を持っていること自体が、わずらわしく感じる。それに呪詛(のろい)をかけられると、あと七回も生まれてこなけりゃならないから、よくよく気をつけなけりゃね! 欲があるから肉体を着させられるんだ」

一人の信者「肉体をまとって化身されて来られた方々(アヴァターラ)にも、欲があるのでございますか?」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ、わたしだって欲がすっかりなくなったわけじゃないさ。あるサードゥが絹の肩掛け(ショール)を着ているのを見て、欲が出たよ。〝あんなのを着たいな〟って。今も欲があるよ。また、生まれてこなくてはいけないからね」

バララーム「ははは……。あなた様は、絹の肩掛け（ショール）のためにお生まれになるおつもりですか？」（一同笑う）

聖ラーマクリシュナ「アハハハハ。一つだけ正しい欲を残しておくことだ。それを想いながら肉体を捨てられるようにね。サードゥたちは四つの聖地（訳註）（チャトル・ダーマ）を廻ることになっているが、一つだけ残しておく。たいていはジャガンナータを祀ったところを残しておくんだよ。そうして、ジャガンナータを想いながら肉体を脱ぐんだ」

黄衣（ゲルア）をまとった人が一人、部屋に入ってきておじぎをした。この人が以前からタクールのことを批難しているので、バララームはつい笑ってしまった。何でもお見透しのタクールは、バララームにおっしゃる――「かまわん、かまわん。ペテン師だとでも言わせておけ」

〔テージチャンドラの世間から離れたい願望〕

タクールはテージチャンドラと話をなさる。

（訳註）四つの聖地――インドの東西南北に位置する聖地で四大神領（チャトル・ダーマ）と呼ばれ、ヴィシュヌ神の化身によってインドが護られているとされる。東はジャガンナータ（〝世界の主〟の意でクリシュナのこと）を祀ったジャガンナート寺院のあるオリッサ州のプリー、西はクリシュナを祀ったグジャラート州のドゥワラカ、南はラーマを祀ったタミル・ナードゥ州のラーメーシュワラム、北はナーラーヤナを祀ったヒマラヤ山中ウッタラーカンド州のバドリーナート。

聖ラーマクリシュナ「(テージチャンドラに向かって)お前に、何度も来るように言ったのに、どうして来ないんだ? うん、瞑想やお祈りをちゃんとしていればわたしはうれしいんだけど――。わたしはお前を、身内のように思っているから呼ぶんだよ」

テージチャンドラ「はい、会社に出なくてはなりませんで――。非常に多忙でございまして――」

校長「お宅で婚礼があったものですから、十日も会社を休んでおられたのです」

聖ラーマクリシュナ「やれやれ、暇がない、暇がない、か! 今しがた、世間から離れたいと言っていたっけが……」

ナラヤン「校長先生がいつかおっしゃいました――ワイルダネス・オブ・ジス・ワールド(この世は荒野のようなものだ)と」

Wilderness of this world

聖ラーマクリシュナ「(校長に)――お前、あの話をしてやると生徒たちのためになるよ。弟子が薬を飲んで仮死状態になっているところへグルがやってきて、家族のものたちにこう言う。私の持っている薬を飲ませればその人は生き返る。でも、先に家族の誰かが飲まなけりゃならない。病人は助かるが、先に薬を飲んだ人は死ぬ、という話。

それからあの話もしてやれ! 曲げたりねじったり――例のハタヨーギーが、妻子は完全に自分に属するものと思い込んでいた話を――」(訳註――これら二つの例え話は一八八五年五月九日に詳しい記述あり)

昼食には、タクールは大聖ジャガンナータにお供えした食物を召し上がった。バララームの家では、毎日欠かせず家の祭神であるジャガンナータの像を礼拝している。それで、タクールはいつも、「バ

ララームのところの食物は清浄だ」と言っておられる。食後、しばらく休息なさった。

午後、タクールは、信者たちとさっきの部屋に坐っておられる。カルタバジャ派のチャンドラ氏と、機知（ウィット）に富んだバラモンが同席していた。そのバラモンは、何やら道化師のような感じのする人で――何か言うたびに、皆はつい笑い出すのだった。

タクールはカルタバジャ派について、いろいろとお話をなさった。――形（ルーパ）、真姿（スワルーパ）（自分の本当の姿）、経血（ラージャ）、精液（ビージャ）、調理法（パク・プラナリ）などについて。

〔タクールの恍惚――アトゥールとテージチャンドラの弟〕

六時になった。ギリシュの弟のアトゥールとテージチャンドラの弟が来た。タクールは殆ど三昧に入っておられる。間もなく、恍惚としたままでおっしゃった。――「意識を思っていて無意識になるかい？　神を想っていて、誰か気が狂った人がいるかい？　――あの御方は知覚そのものの姿なんだ。永遠の、純粋な、知覚そのものの姿だ！」

はじめての客人たちのなかには、「あまり神を想いすぎて、タクールは頭がおかしくなったのではないか？」と思った人も、あるいはいたかも知れない。

〔〝前進せよ〟――クリシュナダーンの冗談話〕

タクールはクリシュナダーンと名乗るおもしろいバラモンと会話をなさる――「一日中、つまらな

い冗談口ばかりたたいて、時間をムダにしているんだねえ。その時間を神の方に向けたらどうかね？　塩を測れる人は、砂糖も測れるよ」

クリシュナダーン「あなた様、どうか私を引っ張って下さい！　ははは……」

聖ラーマクリシュナ「わたしがどうすると言うのだ。すべてはお前の努力次第だよ。〝これはマントラに非ず――いざ、心は汝の心なり！〟（訳註――これは、「マントラ＝真言」という言葉を、「モン＝心」と「トール＝汝の」という言葉に引っかけたベンガル語の言葉遊び）

つまらない冗談は止めて、神の道に前進しろ。もっと、もっと。――ほーら！　坊さんが木こりに、〝もっと先へ進め〟と言ったよ。最初に白檀の木を見つけた――その先に銀の山――その先に金の山――その先にダイヤや宝石がザックザック！」

クリシュナダーン「この道には終点がありません！」

聖ラーマクリシュナ「平安（シャーンティ）になったら、そこが〝休止〟だ」

タクールは一人の新来者についてこう言われた――「あの人の中には、何も根性らしいものが見えない。まるで腐（くさ）ったリンゴみたいに、まったく価値がない」

日が暮れた。部屋にはランプがつき、タクールは宇宙の大実母（ジャガット・マーター）を想い、甘い声で称名しておられる。信者たちが周りをかこんで坐っている。

明日は山車祭（ラタ・ヤートラ）だ。タクールは今夜、この家にお泊まりになる。

奥の部屋で軽食を召し上がってから、又、広間に戻ってこられた。もう十時になるだろう。タクー

ルはモニに、「あの部屋（西隣りの小さな部屋）からタオルを持ってきておくれ」とおっしゃった。

その小さな部屋にタクールの寝床が準備してある。十時半になり、タクールはお休みになった。

暑い季節である。タクールはモニに、「ウチワを持ってきて扇いでくれないか」とおっしゃった。十二時ころ、ふと目を覚まされて、「涼しくなった、もういいよ」とモニにおっしゃった。